

日本における中国商館テラー、ドレスメーカーの形成

中山千代

1. はじめに

本学海外研修制度による中国留学（1982年度）の研究題目「服飾文化日中交流史研究」には、二つの目的があった。一は、古代服飾様式の日中比較によって、和服の形成を同一文化圏に探究し、一は、開国後の日本に洋服商館を開いた中国のテラー（男子洋服裁縫業）とドレスメーカー（婦人洋服裁縫業）の現地調査であった。本拠を北京大学から北京师范大学、上海师范学院（1984年から上海师范大学と改称）に移し、中国社会科学院歴史研究所の沈从文教授指示の訪問表により、福州・南京・镇江・武汉（漢）・江陵・长沙・郑（鄭）州・洛阳（陽）・西安・兰（蘭）州・烏魯木齊（齊）・沈阳（瀋陽）の史蹟・博物館・図書館を尋ねた。このほか、北京大学で承德と大同の見学旅行があり、上海师范学院では杭州旅行に招待され、約2カ月半づつ滞在した北京と上海を加えると、計17城市となった。

古代服飾については、紀元前3—4世紀の江陵楚墓をはじめ、1世紀の长沙馬王堆漢墓、わが国の平安時代にあたる福州南宋黄昇墓等、多数の出土服飾は、まことに驚異的であった。これらの古墓は数千基も発掘され、墓室壁画も10数カ所発見されている。今後の発掘も、予想以上のものがあるだろう。和服形成のミッシング・リンク解明はこれらの出土服飾に、可能性を求めたい。

日本の開港地に渡来して、日本人より早く開業した中国商館については、本学『研究紀要』第23集、「Japan Directoryの研究—洋服業形成

史料として—（2）、1979.」の補充及び現地調査を行った。中国の史料は革命以前のが北京档案馆に、革命以後のは南京档案馆に収蔵されている。しかし、商工関係史料はない。ディレクトリイは、北京・上海・福州・沈阳の図書館・研究所に数冊保存されていたので、「ディレクトリイ所在表」に挿入した。上海の商工史料は、上海社会科学院歴史研究所・上海図書館・上海师范学院図書館所蔵本を調べたが、戦前の文献目録掲載本の多くは、相次ぐ戦乱に失われている⁽¹⁾。しかし、新聞・雑誌類は徐家匯^{シージャーホイ}天主堂蔵書楼に蒐集されているという。徐家匯は明朝の重臣徐光啓が崇禎帝から、出身地上海に賜った地で、ここに葬られている。マテオリッチの高弟徐光啓の子孫はこの地に住み、上海天主教の中心であった。地名も、その由来を伝えている。清朝のキリスト教厳禁時代を経て、1814年の黄浦条約に布教の自由を獲得した上海天主教は、47年（清嘉慶21年）に、この教会を創建した。二本の尖塔が聳える美しいゴシック式教会・学校・天文台・博物院・洋風花園のある徐家匯に、近代文化が開かれた。蔵書楼所蔵本はマテオリッチ以来の宣教師が蒐集した図書を中心に、約30万冊に達するという。日中戦争後、再び荒廃したが、解放後復興され、現在は上海図書館所属となっている。しかし、公開されていない。新聞・雑誌も痛みが激しいため、閲覧を許されず、復印可能の時機まで待たねばならない。戦前、上海歴史地理研究会の沖田一氏は、蔵書楼に入って日中往来史料を筆写した。羨望の図書を見るため、種々な困難を克服して、宣教師テイター師の知遇を得た沖田氏のことを、史料研

究中に発見したが、同氏の消息はわからなかった。上海师范学院歴史教官王鋒全先生の蔵書中に、沖田一著「日本と上海」があり、全文コピーすることができたが、先生も著者については御存知なかった。帰国後偶然にも、ディレクトロイ共同研究者重久篤太郎先生の知友とわかり、京都伏見に沖田氏を訪問した。しかし、上海引揚の際、すべて持ち帰ることはできなかったので、放棄されたという。

日本における中国ドレスメーカーのルーツ、上海業界調査は、中国人民対外友好協会上海市分会の援助によって行われた。同協会の楊路副秘書長は、日中協会白西紳一郎事務局長から送られた上記論文を翻訳して読まれ、中国でまだ行われていない研究分野であるからと、援助を約されたためである。

中国各地での研究について、御指導・御支援を賜った諸先生各位に、厚く御礼申し上げる。

2. 中国における洋服裁縫西洋商館の成立

明治初年にわが国に渡来した中国のテーラー、ドレスメーカーについては、本国の業界成立状況から考察しなければならない。さらに、業界成立の前提として、在留西洋人の衣服需要による西洋商館開業から、中国人が技術伝習の段階を経ることは、わが国の洋服業形成と同様である。また、西洋人居留地が租界であることも、わが国と同じ状況であった。

中国の開港は日本より早く、1842年(鴉片)の南京条約によるものである。アヘン戦争に敗北した清朝は、南京でイギリスと講和条約を結び、香港を割譲し、以前から外国貿易を許していた広州に加えて、廈門・福州・寧波・上海の五港を開いた。翌43年には五港通商規程が定められ、これに準じて、アメリカをはじめヨーロッパ諸国とも調印した。各開港地では、自国の権益を守る租界が設けられた。イギリスはさらに、第二次アヘン戦争といわれるアロー戦争を起し、

北京条約によって九竜を割譲させた。次には、香港保護のためにと、98年(清)に、九竜半島全域を99年間イギリスの租借地とした。天然の良港香港は南アジア交通の要衝にあたり、イギリスの開港によって発展した。1861(光緒)の香港商館数は200を超え、上海74、広東42、福州30、廈門16に対して、はるかに優位であった⁽²⁾。

香港に開かれた61年の商館に、帽子製造・婦人洋服裁縫業、Milliner and Dressmakerの「ミス・ガレット Miss Garret」(皇后大道 Queen's Rond)、「ミセス・ハースト Mrs. Hust」(砵典乍街 pottinger street)、「ミセス・ルナ Mrs. Lunna」(伊裡近街 Elgin Street)、「ミス・ミルズ Miss MiIIs」(皇后大道)、「ミセス・ウインベルグ Mrs. Winberg」(皇后大道)があった。ドレスメーカー6商館に対して、テーラーはまだなかった。男子服は輸入商が扱うこともあり、各自船便で本国から取り寄せたりするのは、後の横浜の状況と同じであろう。帽子と婦人服は現地での需要が多いため、テーラーより早く開業されている。「ミス・ガレット」はマネージャーのミス・ボネット Miss Bonnett 以下5名、「ミス・ミルズ」は4名の裁縫師がいて、大きくはないが、専門店の形態が整っている⁽³⁾。

62年(光緒)には、「ミス・ガレット」「ミス・ミルズ」が続くだけで、他の三店はやめている。新たに「ミス・ノブラ Miss Novra」「マーシュ、ボイヤー商会 Marsh, Boyer & Co.」が開業した。4店とも、中心街の皇后大道に集中した。「マーシュ、ボイヤー商会」は男性2名の共同経営であるが、H. マーシュは本国にいる資本家であって、現地の経営にボイヤーがあたった⁽⁴⁾。ミリナーは女性であるが、経営者は男性である例を見ることができる。このような商館は、女性ミリナリイより規模が大きい。

商館名は、経営者の名で呼ばれている。また、中国人が読めるように、発音に相当する漢字を

あてはめた⁽⁵⁾。これは租界の方が早く、香港では64年(光緒¹⁰)から行われた。同年には、^{Ca-lut}「加律。ミス・キャレット Miss Carrett」があり、「マーシュ、ポイヤー商会」はポイヤーが退き、「マーシュ商会」となった。マーシュはやはり来島せず、ジョージ・ビッグスビー Gorge Bixby 夫妻が経営した。裁縫師は女性3名だけになり、婦人帽子店に変わったようである。新規開業は、^{Bae-ka bow-pat ngei-foo Kungsee}「碧架布疋女服公司。ベーカー商会 Baker & Co.」、^{Pan-nik}「辨匿。ボネット商会 Bonnett & Co.」である。「ベーカー商会」は、S. W. ベーカー経営の生地店が2名の女性裁縫師を置いて、ドレスメーカーを兼ねた。「ボネット商会」は、「ミス・ガレット」のマネージャー、ミス・E. ボネットが独立開業した店である。4商館とも皇后大道にあった⁽⁶⁾。65年(光緒¹¹)に、^{hoi-ya a lek-san-ti-lee}「杯也亜力山地利。ポイヤー、アレキサンダー Boyer Alexandre」(咸靈頓街 Wellington Street)が開業して、5商館になった⁽⁷⁾。67年(光緒¹³)には、「H. マーシュ」が開業、再び4店になった⁽⁸⁾。租界の女性は夫または父に随って帰国するので、短期開業が目立つ中に「ミス・ガレット」と「ミス・ボネット」だけが、10年の安定を保った。男性の商館も期間が短く、植民地初期の小企業は、永続性に欠けていた。

香港テーラーの最初は、1864年(光緒¹⁰)の開業の「ラダーゲ、エールケ商会。Ladage, Oelke & Co.」である。46年(光緒²²)、ドイツ、ハンブルグに開業した同商会は⁽⁹⁾、イギリスの植民地に進出した。経営者の W. ラダーゲと D. エールケはハンブルグに居り、メンバーはマネージャー以下7名である⁽¹⁰⁾。翌65年(光緒¹¹)には、漢字名を「^{O-le-ka}阿厘架」とした⁽¹¹⁾。同店はその後、上海及び日本横浜へ進出する。

香港の市域開発が進行して、66年(光緒¹²)の人口は11万5,000名になった。衣服需要は増大し、翌年には、テーラーの開業が相次いだ。ミリナーの「仔時。マーシュ商会」の新経営者^{Ke-tion-sun}ダヴィッド夫妻はテーラーに転じ、衣料商「^{Ke-tion-sun}扣柳臣。

ミュラー、クラウセン Müller & Claussen」^{A-put Oo-man}「^{A-put Oo-man}亞拔烏文。ウルマン、アルバート Ullman, Albert」^{Pee Kok}「^{Pee Kok}卑覚。セイル、ピーコック商会 Sayle, Peacock & Co.」がテーラーに拡張され、皇后大道の中心部に開かれた。南方の名鳥「卑覚」ピーコック(孔雀)という店名をつけたセイルの商館は、木綿・絹地・男女の帽子・靴下・メリヤス類等種々な服飾品を並べるテーラーであった。R. セイルは本国に居り、W. J. ステリイ Sterry が現地経営者である。裁縫師11名のいる大きい商館であった⁽¹²⁾。後に上海へ進出し、神戸で開業した館員もいる。

上海租界は、1844年(光緒¹⁰)の英中虎門条約によって設定されたイギリス租界、米中望厦条約によるアメリカ租界、49年(光緒²⁵)の仏中黄浦条約によるフランス租界は、黄浦江沿岸に建設された。63年(光緒²⁹)にイギリスとアメリカの租界は合併して共同租界となり、フランスの専管租界との二租界になった⁽¹³⁾。租界は街路樹を植えた広い道の両側に、練瓦や石造のビルディングが並ぶ洋風都市である。これらの建造物は、現上海市の中核となっていて、当時の景観を偲ぶことができる。

上海租界の人口は、当初43年(光緒¹⁹)の25名から60年(光緒²⁶)の569名に、70年(光緒³⁶)の1,660名にと、通商の発展に随って増加した。これは共同租界工部局(政庁)の調査であるから、仏租界人口約400名(65年度)を加えると、2,000余名になる⁽¹⁴⁾。植民地香港に比して上海租界の規模は遙かに小さいが、香港と同様に61年(光緒¹⁷)には、^{Tsang-fong}婦人帽子と洋服の商館「^{Tsang-fong}祥豊。ミセス・マーシュ Mrs. Marsh, milliner and dress maker」があった。但し、香港の6商館に対し、1商館だけである⁽¹⁵⁾。翌62年(光緒¹⁸)に同商館は無く、^{Cheang-fong}ミリナー「^{Cheang-fong}賑房。ミセス・クリフトン Mrs. Clifton」が開業した。彼女の夫 S. クリフトンは、クリフトン商会のオークション^{Wat-Chun}auctioneer である⁽¹⁶⁾。65年(光緒²¹)には、「^{Wat-Chun}挖臣。Wm. ワトソン Watson」が開業して2商館に

った。両店とも、婦人帽子と生地のお店 milliner and drapers であった。同年に、クリフトンは横浜へ衣料商「サムエル・クリフトン Samuel Clifton」を開き、同店のミセス・ピアソン Mrs. Pearson と上海店のミス・キッド Miss Kidd は横浜最初のドレスメーカーとなった⁽¹⁷⁾。しかし、上海本店の「クリフトン」は、67年⁽¹⁸⁶⁷⁾に閉業している。同年には、前年からの「控臣。ワトソン」と、新開業の「泰安。デート商会 Dato & Co.」の二商館がある⁽¹⁸⁾。70年⁽¹⁸⁷⁰⁾には、「楽士。J. H. ペンローズ Penros, millinery and drapery rooms」「弥紗。ミス・ショル Miss Sholl. millinery and general drepary」「活完。ミセス・ウッドワード Mrs. Woodward, millinery and dressmaker」の三商館となった⁽¹⁹⁾。

上海のテーラーも香港と同様に、ドレスメーカーに遅れて始まった。1865年⁽¹⁸⁶⁵⁾に、「士架。セガール商会 Segar & Co.」「泰記。J. タイキイ商会 Tigke & Co.」の2商館が開業した⁽²⁰⁾。67年⁽¹⁸⁶⁷⁾には、香港の「ラダーゲ、エールケ商会が進出して来た。責任者は、ジュリアス・ペルゼル Julius Pelzer である。同年のテーラーは、この「ラダーゲ、エールケ商会」と「士架。セガール商会」の2商館だけであった⁽²¹⁾。70年⁽¹⁸⁷⁰⁾には、「誠記。C. ジャンキー商会 Janke & Co.」「棘地治澳冠。ラダーゲ、エールケ商会」「副利。ホール、ホルツ、HaLL & Holtz」「些原公司。セイル商会 Sayle & Co.」と4商館に増加した。「ホール、ホルツ」は船具商がテーラーにのり出し、「セイル商会」は香港テーラー「卑覚。セイル、ピーコック商会」の進出であった⁽²²⁾。独商と英商は上海でも鎬を削り、活気を呈した。

香港と上海以外の開港地、厦門・福州・広東の居留者は少なく、ドレスメーカー、テーラーの商館はまだ無い。

3. 中国テーラー、ドレスメーカーの成立

中国テーラーの商館名が記載されたのは、1867年⁽¹⁸⁶⁷⁾版の「China Directory」である。「list of the principal Chinese Hongks and Shops in Hongkong」の項に、テーラーの「開利」と「同昌」が挙げられた。同誌がその後も掲載する「与西人貿易香港華商人名録」によって、香港の中国テーラー成立を知ることができる。最初の中国テーラー、「開利」「同昌」の開業年は明らかでないが、67年をあまり逆のぼることはないであろう。同年は西洋人テーラー開業後4年にすぎず、中国人の技術取得には、数年間が必要である。また、同年の西洋人テーラーは5商館に伸長し、彼らの衣服需要増大期に、中国テーラー開業が行われたのである。両商館は香港の中心街皇后大道に開かれた。

70年⁽¹⁸⁷⁰⁾には、「開利」「洪昌」「均案」「南昌」「南盛」「盛昌」「徳記」「和昌」の八店になった⁽²³⁾。彼らのほとんどは西洋商館の出身者であろうが、西洋人テーラーが多くなれば、技術修得の種々な機会を得ることができる。香港に増加した中国商人は、67年の480人から70年の476人へと、淘汰の現象を示し始めている。しかし、テーラーは激増した。同年の建築大工、椅子製造業開業に見られるように、新技術習得から独立への時機はこの頃であった。西洋人の在留生活用品は中国商人から提供され、彼らの生活は便利になった。中国テーラーの成立に対して、西洋テーラーは減少する。上海へ出店して、経営強固な「辣打治」と「些厘」が継続するだけである。以上は香港の中国テーラー成立の状況であるが、ディレクトリーに採録されていないドレスメーカーについては、不明である。

香港以外の中国テーラーについては、明らかでないが、西洋人テーラーの発展した上海では、

香港と同様な中国テーラーの成立が可能である。また、20世紀初期（明治後期）の日本に、寧波・広東テーラーが渡来しているの、両地の中国テーラー成立が確認できる。しかし、その成立は、香港・上海よりもかなり遅れた時期であろう。

上海ドレスメーカーについては、日本に伝聞が残されている。それは、日本渡来の上海ドレスメーカー出身者によって伝えられた。それによると、上海西門に「曹慶蘭」、宝寿山に「裕興」があった。曹慶蘭は天主教信者であった。天主教の教会で女性から洋服裁縫を伝習し、ドレスメーカーを開き、上海最大の店になったという。同店出身の蔡芳州と張鶴亭が来日し、蔡芳州の最初の弟子石塚亀太郎及び張鶴亭弟子張金生の伝えるところである。中国人の洋装店が2—3軒あったという西門は、現西門路にある。広い道路の交差点西側に既製婦人服店があるが、解放後の新しい店であった。天主教の教会は、前述の徐家匯カソリック教会である。「裕興」はドレスメーカーとして繁栄したが、衣料雑貨店に拡張したことから失敗して、閉業したという。同店出身の阿銀、老郷、周瑞卿が神戸に開業した。周瑞卿子息周楣の伝えるところである。横浜に開業した中国人洋服業者は、横浜刊行のディレクトリイに採録されている。

『Japan Herald Directory』『Japan Gazette Directory』を中心とし、その他のディレクトリ及び日本側史料によって、「横浜中国人洋服業者表」(1)~6を作成した（前掲『紀要論文』掲載）。本表によって、来日年月と氏名が一覧できる。しかし、彼らの出身商館は、現在の日本業界に系譜を残した「曹慶蘭」と「裕興」の存在が判明するだけである。

上海ドレスメーカー調査 1982年8月。中国人民対外友好協会上海市分会楊新华先生の案内による。

培罗蒙 南京路に古いテーラーが続いているというので、調査に加えた。同店は1936年（昭

和11）開業の紳士洋服店である。現在、上海で最も古い店の初代テーラーの名は、伝えられていない。陸成法と李佩鶴の古参職人を抱えている。解放後の職人には定年制が定められ、55~60才で退職する。しかし、特に優秀な技術を後進に伝えるため、古い職人を定年制から除いて、残しておくことができる。彼らを古参職人という。陸成法は1918年（大正7）生、65歳、寧波出身である。南山路のフランス人経営男子洋服店「大倉」に、弟子入りして修業した。李佩鶴は1919年（大正8）生、64歳、寧波出身、1936年（昭和11）、17歳で開業当初の「培罗蒙」に入り、現在まで46年間を経た。同店は一階が生地販売、2階がオーダー・ルームである。古参職人のいる技術優秀店として、繁栄している（8月25日）。

朋街 現上海市最古の婦人洋服店は、「朋街」と「鴻朔」である。「鴻朔」には古参職人が居ず、故人の店主は浦東出身であったという以外には、何もわからないということである。「朋街」は1930年（昭和5）頃、イスラエル人、リッシナ（男性）が開いた。解放後、国営のドレスメーカーになり、現在2名の古参職人がいる。上海第一の高級洋装店である。古参職人の徐金福は1916年（大正5）生、67歳、浦東出身、16歳で開業当初の「朋街」に入った。沈金福は1920年（大正9）生、63歳、浦東出身、南京西路の「鴻発」で修業した。1930年代の婦人洋服注文者は、西洋婦人のほか、中国人では音楽家・文芸家・教育者・医師であって、特に音楽家が多かったという。裁断は立体裁断を親方の仕事を見ながら覚え、或は西洋人が持参する服装の本で勉強した。仮縫は幾度も行い、上等生地の場合は、別布を用いた。見習子（徒弟）の年季は5~6年で、その間は給料が無く、小遣銭を与えられた。年季終了の際には満期宴を開き、親方と先輩を招待する。費用は親が負担する。親に負担能力が無い場合には、3カ月分給料を親方から前借した。彼らの職人制は満期

宴を徐いて、日本とほとんど同じであった。但し、お礼奉公の習慣はなかった。(8月27日)。

上海服装研究所 国立の上海服装研究所(南京路)服装陳列室(美民路197弄69号)で、古参職員4名を中心に座談会が開かれた。研究所からは、次の人びとが出席した。服装研究所人員、都安(女性)。服装技士、夏周福。古参技士、郑芝声(1920年生、63歳、寧波出身、男子洋服職人)尹永琪(1917年生、66歳、寧波出身、男子洋服職人)宋福生(1921年生、62歳、浦東川沙県出身、婦人洋服職人)康水斌(1909年生、74歳、浦東川沙県出身、婦人洋服職人)。

服装研究所では、古参職人を古参技士という。現在の技術者に、工士、技士、技術員の三段階がある。高等教育を受けた最高の技術者は工士と称し、経験5年以上で国家試験に合格した者は技士、その以下は技術員である。学制上一般技術者養成は、中等教育課程の技術専門学校で三カ年行われ、職場に配属される。デザインについては、工業美術学院で学ぶことができる。縫製技術にも洋裁専門学校があるが、一般的には職場での技術向上がはかられている。そのため、定年制を超えた古参技士が指導する。

古参技士の年齢は康水斌を除いて60歳代であり、1920年以降の職人であった。康水斌は高齢のため昔のことは忘れたということで、彼らの時代は「朋街」の古参職人の語った状況と同じであった。1920年以前の歴史は、伝えられていない。服装研究所は、縫製技術の研究及びデザインとその基本理論の研究を目的とする。輸出服装については、基礎理論、裁断・縫製の研究を行い、仕立技術に中心がおかれている。国内服は改革理論、設計(デザイン)理論の研究を主とする。改革理論とは、生活レベルの向上した現在の女性美を、洋装に追求することである。機能性を求めて進展した日本の洋装化とは、指標が異っている。しかし、中国側は日本の洋装史報告に興味を示し、座談会は予定時間を変更

して夕刻に及んだ。中国洋服産業中心地の上海で、服装研究所の指導力は、陳列室に展示されている男女洋服と、正面に掲げられた標語額に象徴されている。「百花齊放 推陳出新」には、歴史研究が重要であるというのが、座談会の結論であった(8月27日)。

上海市浦東南匯県新場人民公社 上海洋服業界調査によって、テーラーの出身地は寧波、ドレスメーカー出身地は浦東南匯県と川沙県であることが判明した。これは日本へ来たドレスメーカーにも、共通現象である。日本の中国テーラーは寧波・広東出身、ドレスメーカーは浦東出身であった。日本での調査に、浦東という地名が挙げられていたが、上海調査で始めて浦東の南匯県と川沙県であることがわかった。ドレスメーカーのルーツ浦東調査には、浦東—上海—日本の系譜を明らかにし、歴史の空白を埋めることが出来るかもしれないという一縷の望がある。来日ドレスメーカーの出身地上海から、さらに彼らの故里浦東を訪れるのは、年来の宿望であった。しかし、当地は未解放地区である。中国人民対外協会上海市分会の尽力によって、訪問は許可されたが、一地域だけに限られ、南匯県か川沙県か選ばねばならない。事前問合せも、不可能であった。案内役の協会楊新华氏の調べによると、上海には南匯出身者が多いらしいということで、当地に決定された。

上海からタクシーで約1時間の南匯県の新場人民公社に到着し、当地の人民政府辦公室の顧中南氏、人民公社の陸廣徳氏、服装丁(庁)長倪炎珍女史(陸夫人)の案内で公社の服装工場を見学後、関係者8名の出席する座談会が開かれた。服装工場は設備が整い、技術的には人民公社服装工場中、最も高いレベルであるという。製品のスーツ、ブラウス、ガウン等は、アメリカ・オーストラリア・フランスへ輸出する。既製服産業発展の姿を示す工場には、来日ドレスメーカーについての記憶は残っていない。人民政府にも、解放前の記録は無い。昼食の円

卓に所せましと並べられた十数皿の御馳走は、すべて当地産の材料が用いられていた。穀物・野菜はもとより、魚類さえも養殖し、自給自足体制は豊かである。畑には棉の花が咲き誇り、各種の作物が豊かに実って風にゆれている。清朝末期の窮乏した農村から流離する少年の姿が髣髴し、故郷を思って泣いたというドレスメーカーたちの幼い頃が偲ばれる。豊饒の地を眼前にして、それは鎮魂の訪問であった。川沙県も同様な状況であると説明された。帰途通過した川沙県に心を残しながら、浦東を去らねばならなかった（8月30日）。

4. 日本における中国人テーラー、ドレスメーカー

中国洋服業が早く開かれた香港は、日本から遠く、人びとの交通も盛んでなかった。日本の中国人テーラー、ドレスメーカーは、上海からの渡来である。中国の開港五港中、上海は最も日本に近く、江戸時代には頻繁な交通が行われていた。香港から上海へ進出した西洋商館も、次の目標は日本の横浜であった。

日本で開業した最初の中国人テーラーは、1868年（明治元）の横浜居留地81番「ワー・シン Wa Shin」と、165番「クアン・チョン Quang Chong」である⁽²⁴⁾。「ワー・シン」は81年（明治14）まで、「クアン・チョン」は85年（明治18）まで続いた。ドレスメーカーの開業も横浜に行われ、77年（明治10年）の106番「チンリイ Chigly」106番「サン・ムン Sun Mun」164番「オー・ウィン Wo Wing」の3店である⁽²⁵⁾。3店とも、79年（明治12）まで続いた。中国人テーラーは西洋人テーラー開業後に、進出して来た。ドレスメーカー開業は、さらに10年おけている。77年の横浜居留西洋婦人数は、198名となった⁽²⁶⁾。軍服・官員服・制服等の大量需要のある男子洋服と異なり、ドレスメーカーの顧客は西洋婦人だけである。その増加は、ドレスメーカー開業を促した。西洋

人ドレスメーカーも5商館に増加したが、わが国の婦人洋服業者は1～2店にすぎない。77年（明治10）頃に横浜に開業した「飯旧鉄五郎」は、中国人商館出身と伝えられている⁽²⁷⁾。出身商館名は明らかでないが、中国人から日本人への最初の技術伝習として、注目される。

中国人テーラーは77年（明治10）に11、79年（明治12）に13となり、急激に増加した。ドレスメーカーも、5に伸長した。西洋人テーラー5、ドレスメーカー4であって、中国人テーラーは西洋人テーラーより8多く、ドレスメーカーも1多く、西洋人を凌駕した。しかし、80年（明治13）から92年（明治25）まで停滞した。テーラーは5以上伸長できず、ドレスメーカーは0に落ちこんだ⁽²⁸⁾。この間は、鹿鳴館洋装流行期であった。明治政府が欧化政策に強行した貴族上流社会の洋装は、西洋人と日本人の業者を伸長させた。しかし、海外から渡来する西洋人の開業は限度があり、この好機を掌握したのは、日本人業者であった。技術伝習開始後数年を経て、独立開業する者が輩出した。外国商館出身者も同様である。彼らの多くは東京に開業し、80年（明治13）の35店（婦人洋服店判明数1）から、87年（明治20）には130余店（婦人洋服店判明数14）に激増した。しかし、鹿鳴館洋装の貴族性は、中国商館に発展のチャンスを与えず、日本人業者の膨張によって、凋落を招いたのである。

鹿鳴館洋装がナショナリズムの攻撃と条約改正の失敗によって挫折した後、中国商館は再び伸長した。日清戦争にも拘らず、伸長を続け、1911年（明治44）には、テーラー25、ドレスメーカー1、テーラー・アンド・ドレスメーカー9の35店となった⁽²⁹⁾。日本人業界は絶対的優位を確立していたが、中国人がこれに次ぎ、西洋人業者を圧倒した。明治後期洋装は舞踏会服ではなく、ブルジョワ・モードの生活様式に発展した。男子服はサラリーマンの職業服に定着し、在留西洋人の増加、観光客の日本製洋服

購入などからも、需要が増大した。この大量需要期に、中国業者は高い技術の評価を獲得した。元来器用な資質は、裁縫・料理・理髪などの職業に顕著である。広東テーラーと上海ドレスメーカーには、特に技術的信用が高かった。彼らの店は店主の出身地を記した看板を掲げるだけで、技術上の信用を得ることができた。

明治後期洋装に、中国テーラー、ドレスメーカーの評価を築いたのは、横浜山下町189番「雲記」の繁栄であった。店主蔡芳州サイファンジョウ（旧名蔡雲卿サイユンケン、商売用氏名黄瑞慶フオンレイチン）は、上海浦東出身である。上海の「曹慶蘭」に弟子入りして、技術を習得した。1895年（明治28）に来日し、「雲記」（なつかしい故郷での旧名、蔡雲卿から、雲字を用いた）を開いた。洋服裁縫技術優秀な彼は、また勤儉力行の人であった。船大工の二階借りから始めた店は、彼の努力によって時流に乗り、次第に発展した。明治末年には、山下町80番のビルディングを占め、小僧（弟子）30名、職人30名、店員・番頭を加えて80～100名を擁し、空前絶後の大ドレスメーカーであった。宮中御用の「マダム・ロネ Madame Launei」が1906年（明治39）に、フランスへ帰国した後、同店に代って内親王・宮家の洋服を調製し、前田・鍋島・大隈家をはじめ、貴頭の注文を受けた。中国・日本の職人は競って「雲記」に集まり、名人といわれる職人たちがきら星のように並ぶ工房であった。多数の職人を抱えた「雲記」の賃銀は、洋服職人日給の基準にされていた。1907年（明治40）に起った横浜洋服職人の同盟罷行（ストライキ）に、職人の総攻撃を受けたのは、このためである。

蔡芳州の来日は、同郷浦東人の横浜ドレスメーカー「栄記」の勧誘であった。「雲記」を開いた彼は、弟子の半数以上を浦東人でかためた。また、上海の出身ドレスメーカー「曹慶蘭」の弟弟子張鶴亭チヤンフオアティンを呼びよせた。張鶴亭は「福昌」を開き、従兄弟の張金生フウチヤンを呼んだ。彼らは同族意識が強く、兄弟・従兄弟・同

郷人・兄弟弟子らの縁故者を呼びよせ、横浜に中国人ドレスメーカーとテーラーの業界が形成された。さらに、「雲記」の繁栄に伴って、彼らは横浜洋服の中心勢力となった。彼らは団結して値崩れを防止し、従弟制を強化して、業界の安定をはかった⁽³⁰⁾。

しかし、企業の規模が大きくなった中国人業界では、親方対職人の関係は、労使の対立関係に変質する。1898年（明治31）10月25日に結成された「横浜日清同盟女洋服製造職工組合」⁽³¹⁾は、中国人と日本人の職人の大同団結であった。これに対抗して、「雲記」を中心とする中国人業者に日本人業者が加わって、「西洋女服裁縫業日清同盟会」⁽³²⁾が組織された。強固な同族意識は親方間には機能するが、対職人には破綻した。しかし、1900（明治33）の待遇改善要求には、同族団結の効力によって、親方と職人が同盟する変形的な「第一回日清同盟会」が成立した。その後、再び労資の和解が破れ、遂に同盟罷行に突入し、逮捕者も出るほど過激な争議となった。同族意識の強固な職人制によって発展した中国商館は、最も伸長した時に、内部矛盾が吹き出たのである。

中国商館はテーラーが最も多く、ドレスメーカーは少ない。ドレスメーカーを補うのは、テーラー・アンド・ドレスメーカーである。男女洋服兼業は明治末に、西洋人のテーラー商會が婦人服部を併設するまで、中国人独自の業態であった。日本の業界では、行われていない。中国人にとっては、唐衣タンイー（中国服）仕立業と同形態であった。中国服は男子・女子・子供服ともに、同一職人が仕立っていた。但し、テーラー・アンドドレスメーカーの裁縫師は、技術的に異なるテーラーとドレスメーカーの両職がおかれる。女性の背広型上着はテーラー部へまわす利点もあり、両種を設ける多角的経営は成功していた。大ドレスメーカー「雲記」もテーラーを3～4名置き、ディレクトリイには、テーラー・アンド・ドレスメーカーとして、紹

介されている。

中国人商館は日本の職人を多く傭い、日本人徒弟もおいた。「雲記」の職人は高級服で腕を磨き、彼の経歴に声価を高める。年季5年の徒弟制はほとんど日本と同じであるが、日本にないギルドの親方饗宴が行われていた。満期宴という。「雲記」出身の「唐貴良」「陽文榮」「福昌」らが独立開業した明治末年には、業者数が増大して、横浜洋服の一大勢力を形成した。「雲記」出身の石塚亀太郎・田中久吉らは名人といわれる職人になり、石川政二・田畑年光・野口浜吉らは技術優秀なドレスメーカーとして、日本の洋裁技術を確立した。

「雲記」についての聞書抄

最初の弟子石塚亀太郎口述史料 明治29年末、雲記に弟子入した当時、親方と二人で1銭5厘の食事をした。パン1斤2銭で、昨日のパンを買うと1銭5厘である。それを半斤づつ食べるので、一人7厘5毛であった。

当時、シナの80銭は、日本の1円に当る。親方は上海へ帰って、メリケン針を沢山買ってきた。長1番25本のメリケン針は、日本で7～8銭、上海では2銭であった。同業者に5銭で売って喜ばれ、親方は5～6千円儲けて、一身ひとしん上じょうできた。

注文取の番頭が4～5人いるようになってからも、親方は出かけて、番頭全員の注文取と、親方一人が同じくらいであった。

親方はクリスチャンで素行正しく、偉い人であったが、仕事にも根気があり、裁ちものは全部親方がした。親方はドレスメーカーの神様だと、私は思っています」

明治末の弟子田畑年光口述史料 親方の経営方針はこまかかった。躰糸が落ちていると、拾って袖にかける。朝、ゴミ箱を探して針があったら、掃除当番は櫛の棒でひっぱたかれた。

親方はごひいきの客の人体を作っておいた。お客が来られると、小僧に人体を運ばせ、お客の前で人体に合わせてドレープを作り、お客を

満足させた。また、50センチぐらいの枠に厚い木綿を貼り、フリルを付けて重くしたものを、奥から紐で小僧に引張らせた。枠ごと動いて風が起り、仮縫のお客はよい気分であった。

この頃、親方は辨髪を切り、洋服を着た。まだ和服の日本人業者より、ハイカラになった。

横浜以外の開港地では、在留西洋人の多い長崎と神戸に、洋服商館が開かれた。両地とも西洋人に続いて開業したのは、中国人であった。ディレクトリーの中国商館採録は、香港と横浜にだけ行われたので、各地の中国商館名は、地元の業界系譜あるいは伝聞によって、知るのみである。

長崎では明治初年に、テーラー「トム」「長与号」が開業していたといわれる。長崎最初のドレスメーカー坂田清吉の回想によると、1900年の開業当初、反対する中国人業者30余名に、路上で囲まれたという⁽³³⁾。長崎は上海・寧波・広東に近く、中国人は鎖国の江戸時代にも、唐人町に多数居住し、本国との往来も盛んに行われた。早く開かれた上海の洋服業が波及したことは、充分考えられる。しかし、開港地の繁栄は東京に近い横浜に移り、洋服業は興隆しなかった。

1867年(慶応3)に開港した神戸の在留西洋人は、69年(明治2)に185名、79年(明治12)872、89年(明治22)1,441、97年(明治30)2,042と漸増して、洋服需要が伸長した⁽³⁴⁾。

最初の中国テーラー「其昌号」^{チイチャンハオ}は開港まもなく広東から来神し、多くの中国職人を使って大正年間まで、外国船員の服を中心に営業を続けたという。次いで74年(明治7)ごろ開業した寧波人「応紹有」^{インシャオヨウ}は、69年(明治2)にスキップ商会に招かれ、職人として同商会に勤めていたということである⁽³⁵⁾。しかし、「スキップワース・ハモンド商会 Skipworth Hamond & Co.」(英)の神戸開業は、74年であるから⁽³⁶⁾、応紹有に関する伝聞はこの後のことになる。長崎・神戸の中国テーラーは、西洋人

テーラーに次いで開かれたが、ドレスメーカーの初来は明らかでない。後の業態にもテーラー・アンド・ドレスメーカーが多いので、婦人洋服需要の少ない両地では、初期のドレスメーカー開業は困難であったと思われる。

92年(明治25)ごろ、上海ドレスメーカー「裕興」出身の老卿(老人の尊称、姓名ではない)と阿銀は、横浜を経て来神した。彼らは職人として働き、開業はしなかった。95年(明治28)に二人を頼って、弟弟子の周瑞卿が来た。彼らは上海浦東人である。周瑞卿は中山手2丁目5番地に、「瑞記」を開いた。1907年(明治40)に、周瑞卿が歿した後の「瑞記」を合併したのは、「順記」である⁽³⁷⁾。この頃、テーラーには「其昌号」「和泰」「和隆」(広東人)、「友康」「同義豊」(寧波人)「錢富」「生記号」「益泰昌」(出身地不明)⁽³⁸⁾などがあったが、ドレスメーカーは「瑞記」と「順記」の二店だけであった。「順記」は同じく浦東人であるが、出身の上海ドレスメーカー名は明らかでない。彼は兄弟子阿九を頼って横浜へ渡航し、阿九の尽力で神戸に開業した。「瑞記」合併後繁昌し、徒弟・職人40余名の同店は、「神戸の雲記」と称された。100余名の弟子を養成し、周瑞卿の子周輝楯が「瑞記」を再興したほか、多くのドレスメーカーが開業して、神戸洋装の基礎を確立した⁽³⁹⁾。第二次世界大戦後、全国の中国人洋服業減少期にも、神戸ドレスメーカーは、1975年(昭和50)の中国人テーラー56に対して、49の勢力を維持し、ほとんどが「順記」出身者の系譜である⁽⁴⁰⁾。

業界形成の遅い京都でも、神戸の影響によって、中国人テーラーが先行したという⁽⁴¹⁾。東京は横浜商圈であり、日本人業者も盛況であったため、中国人商館の開業は困難である。1897(明治30)頃、誰一のテーラー・アンド・ドレスメーカー「永興昌」があった。寧波テーラー張某が開き、西洋人むけの商館名は「トム」と称した。同店の婦人服部には、横浜「雲

記」が出張していた⁽⁴²⁾。

むすび

中国人テーラー、ドレスメーカーは、清朝末期の貧しい農村から、生きる場所を求めて、華やかな洋風都市租界へ流出した。租界の新技术洋服裁縫を習得したが、特定の租界衣服需要では、下積み生活を免かれぬ。彼らはさらに新天地を求めて、明治初年の日本開港地へ渡来した。アメリカにも多数渡っている。洋服産業中心地サンフランシスコの裁縫所職工は、中国人に占められていた。しかし、アメリカ合衆国議会は1888年(明治21)9月17日に、「支那人米制議案」を可決して、中国人渡米を規制した。アメリカ入国を制限された中国人は、洋服業の興隆する明治後期の日本へ流入した。中国商館の開業と閉業が激しいのは、本国及びアメリカの政情による流動であった。

上海浦東農村に生れた張鶴亭は貧困農家を出て、上海西門のドレスメーカー「曹慶蘭」に住込み、徒弟となって技術を習得した。横浜へ行って「雲記」を開き成功した兄弟子蔡芳州に招かれ、彼も「福昌」を開業することができた。1903年(明治36)、職人8名を使うようになった彼は、甥の張金生を浦東から呼び寄せた。張金生の父は貧しい農家のため、分家することができず、中国服裁縫職人となったが、日給8銭で子供6人を養う窮状であった。1887年(明治20)生れの金生は、11歳から父の仕事を手伝い、17歳の時、横浜で成功した従兄弟を頼って、家を出たのである。

海外に生活を築かねばならなかった彼らは、同族・同郷人を集めて結束した。農村共同体の郷党意識は故国を離れてなお強固になり、異国生活の団結に効果をもたらした。そのため、日本における中国ドレスメーカーは、浦東人に占められた。この状況は上海でも同じく、上海の中国人ドレスメーカーは現在の古参職人に至るまで、浦東出身である。この系譜をたどれば、

上海で開業した最初の中国人ドレスメーカーは、浦東人であろうか。彼らの出身については明らかでないが、その後の張鶴亭、張金生らの実情から推定することは可能であろう。テーラーが上海では寧波人、日本では寧波人、広東人であるのも、開港地に成立したテーラーの郷党団結であった。但し、上海浦東のような特定地域の有無については、明らかにできない。また、他職の郷党意識はどのような結果を示したか、洋服職と比較できれば興味深い問題である。

日本に発展した中国のテーラー、ドレスメーカーは、日本の職人を傭い、日本人徒弟を養成した。中国商館の技術的信用は彼らにも及び、業界はもとより顧客からも高い評価を得た。毛皮と馬乗スカートの仕立は、西洋商館の技術であるが、中国商館と出身者は、注文を取ることができたという。中国商館は西洋商館と並び、日本の洋服裁縫技術を高めた。

中国商館は香港と横浜だけがディレクトリイに採録され、商館開廢の激しい横浜ディレクトリイは、正確さに欠けるところがある。来日した人びとについて、本国での伝承は得られない。しかし、彼らが日本業界に築いた系譜によって、わが国洋服業形成に、大きな役割を果たしたことを知ることができる。

註

- (1) 上海市政研究会編『上海に関する文献目録』華中鉄道刊。昭和19年 米沢秀夫「上海市文献解題」『上海史話』 畝傍書房。昭和17年
- (2) China Directory. 1861
- (3) 前掲書
- (4) 前掲書。1862
- (5) ローマ字は現在使用されている発音記号ではない。英語的発音であるから、不正確である。
- (6) Chronicle and Directory, for China, Japan & the Phillipines for 1864
- (7) 前掲書。1865
- (8) China Directory for 1867
- (9) ニュールンベルグ大学大学院生 M・ラウクの現地調査による。
- (10) 前掲書。1864
- (11) 前掲書。1865
- (12) 前掲書。1867
- (13) 『上海指南』商務印書館発行。宣統元年五月。張羣『上海租界略史』民国20年
- (14) 『旅行必携上海指南』商務印書館出版。『上海縣城の記』
- (15) 前掲書。1861
- (16) 前掲書。1862
- (17) 中山千代「Japan Directory の研究」(1)『紀要』第22集。1978.
- (18) 前掲書。1867.
- (19) Chronicle and Directory, for China, Japan & the Phillipines for 1870.
- (20) 前掲書。1865.
- (21) 前掲書。1867.
- (22) 前掲書。1870.
- (23) 前掲書。1867.
- (24) 前掲書。1868.
- (25) The Japan Herald Annual Directory, Yokohama, Tokyo, Kobe, Osaka, Hakodate, Nagasaki & Nigata for the year 1877
- (26) 前掲書, 「LAdies' Directory」
- (27) 子息 飯田廣談話
- (28) 中山千代「Japan Directory の研究」(2) 表1・1 横浜中国人洋服業者数『紀要』23集 1979
- (29) 前掲書。表2 年度別横浜商館数
- (30) サンプル調査口述史料。「雲貴」出身者による
- (31) 『横浜市統計書』第1回 明治36年10月30日
- (32) 前掲書
- (33) 子息 坂田直次談話
- (34) Return of British and other Foreign Residents and Firms at the Ports of Hiogo and Osaka
- (35) 『神戸百年史』神戸洋服商工業協同組合編 昭和54年
- (36) China Directory 1873, 1874
- (37) 周瑞卿子息 周耀耀談話

- (38) 『神戸百年史』前掲
 (39) 順記弟子 張金順談話
 (40) 『関西華僑洋服公会通信録』1975年
 (41) 京都のドレスメーカー田中辰次談話
 (42) ドレスメーカー周耀楹談話

上海商工關係參考文獻

(署名) (署名)

上海社会科学院(S-R) 上海师范大学(S-S)
 歴史研究所 上海博物館 (S-H)
 上海図書館 (S-T) 福建省図書館(F-T)
 China Directory for 1863. A.Shortrede & Co.
 Hong Kōng (S-T)

The treaty ports of China and Japan. Dennys and
 Mayerrs. 1865 London (S-T)

甌閩餘談。王韜 光緒元年(1875) (S-S)

重修滬游雜記。仁輪葛元煦理編 光緒2年(1883)
 (S-T)

淞南夢影録画。清 畹香留夢室編 光緒9年
 (1883) 上海進歩局印行 (S-R)

申江名勝図説。管可寿斎 光緒10年(1884)(S-S)

申江名勝図。卷上, 卷下 點石斎 光緒10年
 (1884) 申報館昌画室 (S-T)

點石斎画報。光緒15年(1889)~17年(1891)
 申報館 (S-H)

旅行必携上海指南。商務印書館 宣統元年(1909)
 (S-T)

Guide to Shanghai 上海指南附録, 各省旅行順知,
 上海城廂租界地名表。商務印書館 宣統元年(1909)
 (S-T)

The travellers guid to Shanghai and its environs.
 R.Liewellyn Jones. 1914. Shanghai. (S-R)

大上海。内山清 山田修作 林太郎共著 1915
 大上海社 (S-T)

Trade List of Shanghai 上海行名簿。中国商務
 学会 1917 商務印書館 (S-R)

上海閒話。姚公鶴 中華民國6年(1917) 商務印
 書館 (S-R)

上海商業名録。杭縣徐珂 中華民國7年(1918)
 商務印書館 (S-T)

Commercial hand book of Chinna. volunmell. Ju-
 lean Arnold and Various American consular offic
 ers, washinton. 1919 (S-R)

The Directory & Chronicle for China, Japan,
 Corea, Indo-China, straits straits settlements,
 Malay states, Siam, Netherlands India, Borneo, the
 Philippines, &c. The Hongkong Daily Press, LTD.
 1921 (S-T, F-T)

Far eastern commercial and industrial activity.
 Compilgy E.J.Burgoyne, Edited by F.S.Ramplin.
 1924, The Commercial Encyclopedia Co. London,
 Shanghai, Hongkong. (S-R)

The North-china Desk Hong List. 1925, A gener-
 al and business Direcotry for Shanghai and The
 Northernand River Ports, Ete. (S-R)

中国商務名録。The Comacrid Directory of
 China, Hongkong. 1925 (S-R)

China a commercial and Industrial handbook.
 Ju-Lian Arnold Washinton. 1826 (S-R)

小藍本 The Little Blue book. 1928 Shanghai
 (S-R)

China Hong List. 1931 General and Business
 Directory for Shanghai and the principal ports and
 cities of China. shanghai (S-T)

上海生活。徐国楨。中華民國22年(1933) 上海世
 界書局 (S-T)

上海市年鑑。上海市年鑑委員会 民国24年(1935)
 上海市通志館 (S-T)

上海商工人名鑑。昭和14年(1939) 日支産業協会
 (S-T)

上海商工録。1939(中華民國28) 上海日本商工会
 議書 (S-T)

上海之工商業。楊德惠 董文中 中華民國30年
 (1941) 中外出版社

上海商工録。昭和16年(1941) 版 (S-T)

上海史話。米澤秀夫 昭和17年(1942) 畝傍書房
 日本と上海。沖田一 昭和18年 大陸新報社

上海商工録。昭和19年版。上海日本商工会議所
 (S-T)

Directory 所在調査表

1983年8月作成 重久篤太郎 中山千代

	China Directory			Chronicle Directory			Japan Herard D.		Japan Gazett D.		その他	日本商人録
	東洋 文庫	大英 図書館	その他	東洋 文庫	大英 図書館	その他	公文 書館	その他	公文 書館	その他		
1861(文久1)	○	○	香港大 横浜開港									
62(2)	○		香港大									
63(3)			香港大 上海図									
64(元治1)				○		ケンブリッジ大						
65(慶応1)				○		ケンブリッジ大						
66(2)					○	横浜開港						
67(3)	○		香港大									
68(明治1)				○	○	ケンブリッジ大						
69(2)						大英図, 長崎図						
70(3)				○	○	ケンブリッジ大		金沢文庫			Morris's Directory 西川孝治郎	
71(4)					○							
72(5)			香港大			香港大	○	横浜開港		東洋文庫		
73(6)	○		香港大	○								
74(7)	○		香港大			大阪大						
75(8)						横浜開港			○	東洋文庫		
76(9)				○		神戸女学院			○	東洋文庫		
77(10)						香港大	○		○			
78(11)					○	天理図		神戸女学院	○			
79(12)							○		○	函館図		
80(13)				○		横浜開港	○		○			東京商人録
81(14)				○					○	横浜開港, 函館図		横浜商人録
82(15)									○	京大法経, 函館図	Honkong D. 横浜開港	
83(16)						横浜開港			○	都公文書館		
84(17)						香港大			○	函館図	Honkong D. 香港大	
85(18)				○		長崎大, 横浜開港			○	函館図		
86(19)									○			日本絵入商人録

日本における中国商館テラー、ドレスメーカーの形成

87(20)				○					○	函館図 神戸女学院	Meiklejohn's J.D. 横浜開港	
88(21)									○	東北大, 上野図	東洋文庫に○	
89(22)				○					○	都公文書館 横浜開港		
90(23)						長崎図			○	東大図		
91(24)									○	横浜開港		
92(25)									○	函館図		
93(26)						横浜開港			○		Meiklejohn's J.D. 横浜開港	
94(27)				○					○			
95(28)						長崎大			○	神戸女学院		
96(29)									○		Meiklejohn's D. 西川孝治郎	
97(30)						長崎大			○	都公文書館		
98(31)				○					○	J.D.横浜開港	Kobe Herald 関西大	
99(32)				○					○			
1900(33)				○					○			
1(34)				○					○			
2(35)				○					○	函館図, 上野図	The China hond list (1902-40) 北京図	
3(36)				○					○	J.D.北大北方研, 函館図		
4(37)				○					○	J.D.横浜開港		
5(38)				○					○	J.D.横浜開港		
6(39)				○		長崎図			○			
7(40)				○		長崎図			○	J.D.横浜開港		
8(41)				○		京大図			○			
9(42)				○					○	J.D.横浜開港, 京大図		
10(43)				○		京大法, 長崎図			○			
11(44)				○					○		Kobe.D. 神戸中央図	
12(大正1)				○		神戸中央図			○		Kobe.D. 神戸中央図 Kobe.H. 神戸中央図	
13(2)				○					○	J.D.横浜開港	Kobe.D. 神戸中央図 Kobe.H. 神戸中央図 Chronicle & D.of china辽宁省図	
14(3)				○	○				○		The social directory of Tokyo and Yokohama 横浜開港	
15(4)				○		神戸中央図			○			
16(5)				○					○			

	China Directory			Chronicle & Directory			Japan Herard D.		Japan Gazett D.		そ の 他	日本商人録
	東洋 文庫	大英 図書館	その他	東洋 文庫	大英 図書館	そ の 他	公文 書館	その他	公文 書館	その他		
17(6)				○		京大法経, 神戸中央図			○			
18(7)				○					○		Kobe kansai D. 神戸中央図	
19(8)				○					○		Kobe kansai D. 神戸中央図 J.D.(London)横浜開港	
20(9)						神戸中央図				東洋文庫		
21(10)				○		京大法経, 上海図, 福建省図						
22(11)				○		神戸中央図					List of persons buried One foreingcemetery Kobe(1867-1922) 神戸中央図	
23(12)				○	○	神戸中央図			○			
24(13)						名大経, 神戸大経, 神戸女学院, 神戸中央図						
25(14)				○		東大図, 神戸中央図			○		The North-China Desk Hong List 上海図 Chronicle & D. of china 辽宁省図	
26(昭和1)				○		名大経, 神戸大経, 神戸中央図					The Directory of Japan 横浜市図	
27(2)				○		神戸中央図					The Directory of Japan 横浜市図 神戸中央図	
28(3)				○		神戸中央図					Kobe. Shoko-bu. The foreign firms directory of Kobe 上野図	
29(4)				○		京大法経, 九大, 神戸中央図					Directory of Japan V 東洋文庫	
30(5)				○							Directory of Japan VI 東洋文庫	
31(6)				○		京大法経					China Hong List 上海図	
32(7)				○							Chronicle & Directory of china (London) 辽宁省図	
33(8)				○							Chronicle & Directory of china (Hongkong) 辽宁省図	
34(9)				○	○							
35(10)				○								
36(11)				○							Japan Chronicle. List of foreign residents in the Japanese Empire 上野図	
37(12)				○							Kobe & Osaka Press. The foreign firms & residents of Japan 上野図	
38(13)				○							Japan Chronicle directory 同大 ケリー文庫	
39(14)				○	○	神戸大経研					Chronicle & Directory of china (London) 辽宁省図	
40(15)				○		京大法経						
41(16)				○		京大法経, 神戸中央図						

- 凡 例 1 Chronicle & Directory は 1903 年以降 Directory & Chronicle に誌名変更。
 2 The Japan Gazett Directory は 1870 年以降 The Japan Directory に誌名変更。
 3 略号 D=Directory J.D.=Japan Directory 図=図書館